

平家納経の思想と装飾プログラム

— 宝塔品紙背にみる四季絵と法華経二十八品大意絵との関わりから —

兵庫県立歴史博物館 橋村 愛子

今日、「平家納経」として伝えられる厳島神社の装飾経は、平清盛はじめ平家一門によって奉納された一品経で、その大部分が長寛2年(1164)当初の一具として認められている。とくにその装飾は、贅を尽くすばかりでなく機知に富んだ意匠を凝らし、複雑な構想を背景に持つことが注目を集めてきた。近年では、折枝散らし文や浮遊する唐草などの文様にみる料紙装飾の様式的分析や、普門品表紙・見返しの図像学的分析などから、わたくしも企画意図に関する些少の見解を有するに到ったが、今回の発表では宝塔品をとりあげ、その意匠からより深い思想背景の考察へと迫りたい。

宝塔品の本紙は全七紙を継ぐもので、五輪塔のうち水輪の中に経文の一字一字が墨書されており、経典をすなわち仏とみなす信仰の表れとして知られる。また紙背は金銀箔散らしなどによる装飾料紙を下地に、色鮮やかな水辺の景を描く。第一紙から順に梅花・柳樹・桜花・藤・菖蒲・紅葉・満月・下弦の月などを配することにより四季を表しており、これまでも諸先学によって平安時代に遡る四季絵の遺例として重視されてきた。しかし、梶谷亮治氏が指摘されるように、発装金具の表紙側は、銀製の独鉗を三個連ねた形に作るもので、本紙には五輪塔という密教的な意匠を採用しており、密教との関わりにも留意が必要であろう。

結論から言えば、宝塔品紙背には冒頭から順に、片輪車が転法輪を象徴することで序品の法華経開示を、汀の石積みみの塔が方便品の童子造塔を、荷駄が旅人を暗示させることで化城喩品の宝所化城喩を、雁の向かう満月が寿量品の常在靈鷲山を、瓶が亀をなぞらえ厳王品の浮木盲亀の譬えを、さしのぼる下弦の月が勧発品の普賢来儀を、それぞれ表現しているのではないかと考えられる。なおこれまでも、第二紙の「我」「長者」の画中文字や葦手が、今様を下敷きとした譬喩品の経意を暗示することや、第五紙の薪の荷が提婆品の阿仕仙給仕を暗示する可能性があることなどが、すでに指摘されている(白畑よし氏、亀田孜氏、小松茂美氏)。これらを当時の和歌・今様や院政期の紺紙金字法華経見返し絵の図像とも比較検討すると、法華経二十八品の代表的な経意を選び、八巻本法華経に四季が順配される構成をとっていることが分かる。つまり宝塔品の紙背には、やまと絵の形式をとった法華経二十八品大意絵が表されている。

平家納経の平清盛長寛二年願文によれば、伊都伎島神は法華経二十八品として顕れ、また観音菩薩が垂迹して顕れた姿であると記されている。つまり伊都伎島神に法華経と観世音菩薩とが重層されて理解されている。願文の作者は藤原俊憲(1122~67)とみる有力な説が近年提示されているが(マイケル・ジャメンツ氏)、その実弟の澄憲(1126~1203)もまた、法華経と観音とは表裏一体の存在であると唱道している(真福寺本『花文集』巻第四)。平家納経宝塔品の荘嚴として、紙背に法華経二十八品の大意を意匠することは、法華経あるいは観音や舍利を介在して、伊都伎島神を重層させた表現ではないだろうか、という試論を提示したい。